

正三位式部卿藤原朝臣宇合 六首【年三十四】

五言暮春曲宴南池 並序

夫王畿千里之間。誰得<sup>レ</sup>勝池<sup>ニ</sup>。帝京<sup>ニ</sup>春之內。幾<sup>イカバカ</sup>知<sup>ニ</sup>行樂<sup>ヲ</sup>。則有<sup>リ</sup>沈鏡小池<sup>ニ</sup>。勢無<sup>レ</sup>劣<sup>ニ</sup>於金谷<sup>ニ</sup>。染<sup>レ</sup>翰良友。數不<sup>レ</sup>過<sup>ニ</sup>於竹林<sup>ニ</sup>。爲<sup>レ</sup>弟爲<sup>レ</sup>兄。醉<sup>レ</sup>花醉<sup>レ</sup>月。包<sup>ニ</sup>心中之<sup>ニ</sup>四時<sup>ニ</sup>。屬<sup>ニ</sup>暮春<sup>ニ</sup>。映<sup>スルニ</sup>浦紅桃。半落<sup>チ</sup>輕錦。低<sup>タルニ</sup>岸翠柳。初<sup>メテ</sup>拂<sup>ニ</sup>長絲<sup>ヲ</sup>。於<sup>レ</sup>是林亭問<sup>レ</sup>我之客。去<sup>ニ</sup>來花邊<sup>ニ</sup>。池臺慰<sup>レ</sup>我之賓。左右<sup>ニ</sup>琴樽<sup>ヲ</sup>。月下芬芳。歷<sup>ニ</sup>歌處<sup>ニ</sup>而催<sup>シ</sup>扇。風前意氣。步<sup>ニ</sup>舞場<sup>ニ</sup>而開<sup>レ</sup>衿雖<sup>トモ</sup>歡娛未<sup>レ</sup>盡而能事<sup>ニ</sup>紀筆<sup>ヲ</sup>。蓋<sup>ナン</sup>各言<sup>ニ</sup>志<sup>ヲ</sup>。探<sup>テ</sup>字成<sup>ニ</sup>篇<sup>ヲ</sup>云爾<sup>シカ</sup>。

得<sup>テ</sup>地乘<sup>ラシ</sup>芳月<sup>ニ</sup>。臨<sup>テ</sup>池送<sup>ニ</sup>落暉<sup>ヲ</sup>。琴樽何日斷<sup>ン</sup>。醉裏不<sup>レ</sup>忘<sup>レ</sup>歸<sup>ヲ</sup>。

王畿、『周禮』に乃辨<sup>チス</sup>九服之邦國。方千里曰<sup>フ</sup>王畿。王城附近の地を指す。帝京に於て春游の好きは、其れ何れの處ぞや、乃ち是れ南池は小池なりと雖も、鏡を沈める如き玲瓏なり。其の勢は金谷より勝るとも、劣ること無し。金谷園は晉の石崇が造る所。而して晉の世、染翰、所謂文を作り、詩を賦する者は、竹林の徒、六七人に過ぎず。爲<sup>レ</sup>弟無<sup>レ</sup>兄、嵇康、阮籍、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎、是の人等が兄と稱し、弟と稱したるなり。

先哲曰く、包心中之四の下に海、盡<sup>レ</sup>善盡<sup>レ</sup>美、對<sup>ニ</sup>曲裏之雙流<sup>ニ</sup>是日也人乘<sup>シ</sup>芳夜<sup>ニ</sup>の十八字を加ふ可しと、則ち知る是れ以て意味始めて通ずるなり。醉<sup>レ</sup>花醉<sup>レ</sup>月。包心中之四海、花月吟賞の天地。頗る寛廣なるを云ふ。盡<sup>レ</sup>善盡<sup>レ</sup>美、對<sup>ニ</sup>曲裏之雙流<sup>ニ</sup>、我は竹林の徒と異なる。今日の遊びの如きは善美を盡し、花月と同じく。塵濁無きなり。雙流の水に對して、茲に宴す。樂は言ふべからず。是<sup>レ</sup>日也人乘<sup>シ</sup>芳夜<sup>ニ</sup>、春夜を芳花と言ふ。時屬暮春、而かも暮春、浦に映ずる紅桃も、半ば飛て水に落ち、岸に低るる翠柳は、初めて長絲を拂ふ。而して我を問ふ客もあり、我を慰むる賓もあり、各の得意の歌を謳ひ、得意の舞を演ず。歡娛は未盡なるも、遊は記せざるべからず。乃ち字を探り、以て各の志を敘ぶ。曲宴は曲水の宴會、王羲之が遺意

を追ふものなり。得地、春を賞するには其の所を得ざるべからず。幸に此の勝地を得て、芳月所謂三月の遊びを爲す。臨池、曲水の遺意は水無くんば不相應なり。幸に南地に遊び、夕陽即ち濱暉に到る。而かも琴樽、興の盡くこと無し。而かも不忘歸、留連して歸を忘るは小人の事なり、詩人は歸るを忘れず。昔は謝元暉、遊子澹 忘歸と歌ふ。今は醉裏不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>歸と曰ふ、共に身分を損ぜず。

### 七言在<sub>二</sub>常陸<sub>一</sub>贈<sub>二</sub>倭判官留在<sub>レ</sub>京<sub>一</sub> 一首並序

僕與<sub>二</sub>明公<sub>一</sub>。忘言歲久。義存<sub>二</sub>伐木<sub>一</sub>。道叶<sub>二</sub>採葵<sub>一</sub>。待<sub>二</sub>君千里之駕<sub>一</sub>。于<sub>レ</sub>今三年。懸<sub>二</sub>我一箇榻<sub>一</sub>。於是九秋。如何授官。同日。乍別<sub>二</sub>殊鄉<sub>一</sub>。以爲<sub>レ</sub>判官。公潔<sub>二</sub>等水壺<sub>一</sub>。明<sub>二</sub>逾<sub>二</sub>水鏡<sub>一</sub>。學隆<sub>二</sub>萬卷<sub>一</sub>。智載<sub>二</sub>五車<sub>一</sub>。留<sub>二</sub>驥足於將<sub>レ</sub>展<sub>一</sub>。預<sub>二</sub>琢<sub>二</sub>玉條<sub>一</sub>。迴<sub>二</sub>鳧<sub>二</sub>鳥之擬<sub>レ</sub>飛<sub>一</sub>。忝<sub>二</sub>簡金科<sub>一</sub>。何異宣尼返<sub>レ</sub>魯<sub>一</sub>。刪<sub>二</sub>定詩書<sub>一</sub>。叔孫入<sub>レ</sub>漢。制<sub>二</sub>設禮儀<sub>一</sub>。聞夫天子下<sub>レ</sub>詔。置<sub>レ</sub>師審<sub>二</sub>才問<sub>一</sub>。茲擇<sub>二</sub>三能之逸士<sub>一</sub>。使<sub>二</sub>各得<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>。明公獨<sub>二</sub>自<sub>レ</sub>遺<sub>二</sub>闕此舉<sub>一</sub>。理合<sub>二</sub>先進<sub>一</sub>。還是後夫。譬<sub>二</sub>如<sub>二</sub>吳馬瘦鹽<sub>一</sub>。人尙無<sub>レ</sub>識。梵臣泣<sub>レ</sub>玉世獨不<sub>レ</sub>悟。然而歲寒後。驗<sub>二</sub>松竹之貞<sub>一</sub>。風生<sub>二</sub>迺解<sub>二</sub>芝蘭之馥<sub>一</sub>。非<sub>二</sub>鄭子產<sub>一</sub>。幾<sub>二</sub>失<sub>二</sub>然明<sub>一</sub>。非<sub>二</sub>齊桓公<sub>一</sub>。何<sub>二</sub>學<sub>二</sub>寧戚<sub>一</sub>。知<sub>レ</sub>人難<sub>レ</sub>匪<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>耳。遇<sub>二</sub>時之罕<sub>一</sub>。自<sub>レ</sub>昔然矣。大器之晚。終成<sub>二</sub>寶質<sub>一</sub>。如有<sub>二</sub>我一得之言<sub>一</sub>。庶幾<sub>二</sub>慰<sub>二</sub>君<sub>二</sub>三思之意<sub>一</sub>。今贈<sub>二</sub>一篇之詩<sub>一</sub>。輒示<sub>二</sub>寸心之歎<sub>一</sub>。其詞曰。

忘言は、『晉書山濤傳』に、濤與<sub>二</sub>稽康呂安善<sub>一</sub>。後遇<sub>二</sub>阮籍<sub>一</sub>。便爲<sub>二</sub>竹林之交<sub>一</sub>。著<sub>二</sub>忘言之契<sub>一</sub>と。親友なりとの意。忘形、忘年、皆同義とす。義存伐木、『禮記』に、日短至則伐<sub>レ</sub>木取<sub>二</sub>竹箭<sub>一</sub>。『詩經』に、伐木丁丁。鳥鳴嚶嚶とあり。道叶採葵、漢代の古詩に、採葵不<sub>レ</sub>傷<sub>レ</sub>根。傷<sub>レ</sub>根葵不<sub>レ</sub>生とあり。伐木も採葵も共に朋友として艱難相救の意。而して作者は常陸に在り、君が京を出て此地に來るを待つこと三年。君を待つに一箇の榻を懸てあり。『後漢書』徐穉傳に、徐穉は南昌の人、恭謙禮讓なり。太守陳蕃、禮を厚うして請ふて功曹【官名】と爲す、既に謁して退く。蕃郡に在て、賓客に接せず、唯穉來れば、時に一榻を設く、去れば則ち之を懸く。

要するに一人の爲めに設く、他人の爲には設けず。九秋は即ち三年なり。授官同日、任官は二人同日なるも、一は常陸、一は京都と殊郷なり。氷壺、判官が心事の濁らざるを謂ふ。水鏡も同様なり。五車は星の名。轉じて書物の多きを言ふ。驥足は騏驎の足。能く遠きに馳る如きを謂ふ。『三國志』龐統傳に、使<sub>レ</sub>處<sub>二</sub>治中別駕之任<sub>一</sub>。始<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub>展其驥足耳<sub>三</sub>。預琢玉條、玉條は「法令」を謂ふ。漢の楊雄が文に、金科玉條とあり。判官の役たる、法令を琢かざるべからず。鳧鳥、後漢の王喬、顯宗の世に葉令と爲る。神術あり、毎月朔望朝に謁す、帝其の來る數なるを怪しみ、之を伺ふ、至るに臨んで、雙鳧東西より飛來するあり、羅を擧げ之に張る。但一雙の鳧を得たり。以て後世縣令や刺史に沿用す。忝簡金科、縣令たるの任を忝くす。此の如く出仕するも皆國家の爲めなり。宣尼即ち孔子が、諸侯に用ゐられず、魯國に返て、詩書を刪定したり。又叔孫が、漢の高祖に説て朝儀典禮を制設したると其の功は同じ。天子下詔、置師咸審才周、三能は明白に斷じ難きも『史記』に星名即三台也、三能色齊<sub>タイ</sub> 君臣和<sub>シ</sub> 不<sub>レ</sub>齊爲<sub>二</sub>乖戾<sub>一</sub>と三台が其の所を失ふは天の不祥なり。逸士が其の所を得ざるは國の不祥なり。適材を適處にもちひ玉ふ、故に臣僚も各自に其の所を得て、安住する。獨自遺闕此學、判然と解し難きが、要するに地方官に榮轉するのが當然なるに、明公は獨自から此の問題に觸れずして、依然京に留るとの意ならん。理合先進、還是後夫、明公は先輩にて、我は後輩なり。先輩が依然として、後輩が出世するは、それは譬へて見れば、吳馬瘦鹽、人尙無識、此の八字、未檢出典、楚臣泣玉、世獨不悟、楚の卞和が玉を抱いて荆山の下に泣き、而かも愚劣なる國王は何度玉であると紆べしとて、沒分曉と云うて悟らぬが如し。其の人の正直なるを表はす。而かも松竹の貞操、芝蘭の香馥は、自然掩ふ能はざるものあり。鄭子産、春秋鄭の大夫公孫僑の字なり。東里に居す、又東里子産と稱す。博治多聞、而して政治に長ず。鄭の簡公の時より國に當る。定公、獻公、聶公を歴て、凡そ四十餘年。時晉楚覇を争ふに當る。能く大に事ふるに禮を以てす。而して苟くも其の欲に徇はず。晉楚皆之を嚴憚す。政を爲す。寬以て猛を濟ひ。猛以て寬を濟ふ。孔子稱して惠人と爲す。又稱す君子

の道ある四。其己おのれを行ふや恭。上に事ふるや敬。民を養ふや惠。民を使ふや義。幾失然明、然明は春秋鄭の人。姓は駸名ちゆうは蔑べつ。字は然明。鄭の太子子産の爲め用ゐられて鄭の爲め功を顯はす。晉の叔向。鄭に如く。蔑、容貌醜惡なり。器を堂下に執る。一言にして善。叔向が曰く。必ず然明ならん。其の手を執て堂に上す。叔向は然明の善を知りしなり。子産は然明の智を用ゐしなり。甯戚は春秋の人。家貧にして資無く。人の爲め車を挽き齊に適く。偶ま桓公の出遊するに遇ふ。戚、牛角を控いて歌うて曰く。南山絜。白石爛。中有鯉魚。長尺半。生不遭堯與舜。禪一。短布單衣纒。至飢。從昏飲牛至夜半。長夜漫漫何時旦。桓公聞いて之を異とし。召して上卿と爲す。今日も昔日も。人は知己に遇ふこと難し。才を抱きながら空しく草萊に沈吟する人幾箇ぞや。然りと雖も。『老子』には、大器晩成とある。早成のものは早朽し易し。明公如し我が言ふ所の意旨に於て得るあらば。我が此の詩を作るの寸心は達したるなり。以て君を慰するに足らん。

自<sub>リ</sub>我弱冠從<sub>二</sub>王事<sub>一</sub>  
風塵歲月不曾休<sub>一</sub>  
褰<sub>レ</sub>帷<sub>ヲ</sub>獨坐<sub>ス</sub>邊亭<sub>ノ</sub>夕<sub>ニ</sub>  
懸<sub>テ</sub>榻<sub>ヲ</sub>長悲<sub>ム</sub>搖落<sub>ル</sub>秋<sub>ノ</sub>  
琴瑟之交遠<sub>ク</sub>相阻<sub>ヘタル</sub>  
芝蘭之契接<sub>スルニシ</sub>無<sub>レ</sub>由<sub>シ</sub>  
無<sub>レ</sub>由<sub>シ</sub>何見<sub>ン</sub>李<sub>ト</sub>將<sub>レ</sub>鄭<sub>ト</sub>  
有<sub>レ</sub>別<sub>ソ</sub>何逢<sub>ハシ</sub>達<sub>ト</sub>與<sub>レ</sub>猷<sub>ト</sub>  
馳<sub>ヲ</sub>心<sub>ヲ</sub>悵望<sub>ス</sub>白雲<sub>ノ</sub>天<sub>ノ</sub>  
寄<sub>レ</sub>語<sub>ヲ</sub>徘徊<sub>ス</sub>明月<sub>ノ</sub>前<sub>ニ</sub>  
日下皇都君抱<sub>ク</sub>玉<sub>ヲ</sub>  
雲端邊國我調<sub>レ</sub>絃<sub>ヲ</sub>  
清絃入<sub>レ</sub>化<sub>ニ</sub>經<sub>ニ</sub>三歲<sub>ニ</sub>

美玉 韜光 度幾年  
知己 難逢 匪今耳  
忘言 罕遇 從來然  
爲期 不怕 風霜觸  
猶似 巖心 松柏堅

弱冠は二十歳前後を謂ふ。風塵は字の如く風と塵。杜甫、薄官走風塵の句あり。王事即ち國事に奔走して、曾て休息せざるなり。褰帷、褰は袴なれど、動詞の場合「カカゲル」と訓む。邊亭は亭の名にあらず、京に比較して常陸は邊土なればなり。懸榻、知己來らず故に下榻せず。琴瑟之交、芝蘭之契、良友を指す。即ち倭判官なり。李將鄭「左傳」に鄭以爲東道主行李之往來、供其乏困。今日は李と鄭との如き人無し。逵與猷、晉の戴逵と王子猷なり。猷は月夜に乘じ逵を剡溪に訪ひしも、逢はずして返る。白雲天、明月前、遠く隔たるを表はす爲めと、白雲の如く、又明月の如き友情とを表はす爲めと、一意を含む。日下は天皇の御膝下を謂ふ。雲端は都を去る遠きを謂ふ。抱玉「判官たる職を守るを謂ふ」、調絃は琴を調べるなり。琴を調べるは娛樂の爲にはあらず、治化の道に在るなり。美玉韜光、韜は弓衣「ユミノフクロ」なり、光を藏して外に表はさざるを謂ふ。此の四字は漢の孔融の詩なり。今以て倭判官に譬ふ。知己、忘言、忘言は即ち知己、知己は即ち忘言なり。人生眞の知己は遇ひ難し、古今と無く同一。而かも風霜の昔は耐へ得て、一生涯、巖心松柏と同じく、堅きを期すべしとなり。

此の篇、韻を換ること二。而して三年此の知己に會せざるを傷む。又集中の傑作たるを失なはず。

七言秋日於左僕射長王宅宴

帝里 煙雲 乘季月  
王家 山水 送秋光

露 蘭 白 露 未 催 臭  
泛 菊 丹 霞 自 有 芳  
石 壁 蘿 衣 猶 自 短  
山 扉 松 蓋 埋 然 長  
遨 遊 已 得 攀 龍 鳳  
大 隱 何 用 覓 仙 場

季月は一年の終りと、四時の終りと二義に用ふ。今は秋の終り、九月を指す。此の晩秋に當て、王家に於て秋光を賞送する。秋光の景色は乃ち下の如し。白露は盛んに蘭を露すも、葉は茂きも、花はいまだ開かず、臭を催さざる所以。丹霞は菊に泛ぶ、是れ芳香ある所以。石壁蘿衣、宅に沿ふて石壁あり、石壁に挂るに蘿衣あり。而かも春日にあらず、ツタが短し。門扉を掩ふの松蓋は、埋然長。蘿衣は短而小。松蓋は長而大。遨遊は樂遊なり。攀龍鳳、『後漢書』に攀龍鱗附鳳翼の語あり。龍鳳は天子に譬ふるが本義なれど、皇統の人なれば不妨。此の席に陪食するを謝するなり。大隱、小隱は仙場を求むるあらん。大隱は、市中に在て仙場を覓めざるなり。王康琚の詩に小隱隱陵藪。大隱隱朝市とあり。

七律としては、句格整正、此の集に在て上乘の部に屬す。

### 五言悲不遇

賢 者 悽 年 暮  
明 君 冀 日 新  
周 占 載 逸 老  
殷 夢 得 伊 人  
搏 擧 非 同 翼  
相 忘 不 異 鱗  
南 冠 勞 楚 奏

北節倦<sup>△</sup>胡塵<sup>二</sup>  
學類<sup>ハ</sup>東方朔<sup>二</sup>  
年<sup>ハ</sup>餘<sup>レリ</sup>朱買臣<sup>二</sup>  
二毛雖<sup>トモ</sup>已<sup>ニ</sup>富<sup>メリ</sup>  
萬卷徒然<sup>トシテ</sup>貧<sup>シ</sup>

題して悲不遇と云ふ、例の少なき題目なり。迷懷又は感慨、又は言志、一にして足らず、少年諸子は此の如き題を學ぶべからず。古訓に悲<sup>△</sup>不<sup>レ</sup>遇<sup>ルコトヲ</sup>あり。何人に遇はざるを悲しむ者か、作者が自家の事を敘せしにや、人に代て作りしものか、判然せず。自分とすれば身已に式部卿の高官と爲る、何の不遇かあらん。官を罷めて後の作とすれば、それ一種の不平なり。孰れにしても題目の愚劣なることは否定すべからず。賢者<sup>ハ</sup>は、志成らずして年<sup>ハ</sup>の暮<sup>ル</sup>るを懐む。明君<sup>ハ</sup>は、斯民<sup>ノ</sup>の爲め日に新たなるを冀ふなり。周日<sup>ノ</sup>の日の字は意義無し、周の時の意義なり。逸老<sup>ハ</sup>は呂尚、即ち太公望、舟に載せて引き來るなり。殷夢<sup>ハ</sup>は、殷の高宗武丁、夢に良弼を得て説<sup>エツ</sup>と曰ふと、求めて之を得、立てて宰相と爲す。伊人<sup>ハ</sup>は斯人<sup>ノ</sup>なり、偉人と改めて可なり。周と殷と國の前後、後を前出し、前を後出するも、是れは妨げ無し。搏<sup>ハ</sup>擧<sup>ハク</sup>、搏<sup>ハク</sup>と搏<sup>ハク</sup>と同じからず、而かも『莊子』に、搏<sup>ハク</sup>扶搖<sup>ハク</sup>而上<sup>ルモノ</sup>者九萬里と一本に在り、一本には、搏<sup>ハク</sup>扶搖<sup>ハク</sup>而上<sup>ルモノ</sup>者九萬里とあり。本義より觀れば、搏<sup>ハク</sup>は「ウツ」撃なり、搏<sup>ハク</sup>は圓「マルメル」なり。訓の上も、形の上も、已に異なる。而かも『莊子』に一定せざる本<sup>ホシ</sup>あるは、遂に解すべからず。余は私見ながら搏<sup>ハク</sup>の方を取る。然らば此の句は何を意味するや。翼は鳥類、鱗は魚類、一は天上に騰り、一は水底に潛む。天上に登る類の物種種あるが、其れは一一同じ翼にはあらず、水底に潛む類の物も種種あるが、其れは一一鱗<sup>ウロコ</sup>の異なるものにあらず。高能でありながら潛む魚もあらん。低能とて潛まざるを得ずして潛む類の魚もあらん。又天上に登る鳥も、自力にて登る奴もあらん。他力にて登る奴もあらん。而かも不幸にして登る力の有るものが登れず、水を撃て躍れるものが躍れずして潛むものも

あらん。所謂不遇を悲しむ所以、其れ此にあるか。相忘は彼も此も忘れ是も非も忘れ高も低も忘れるの意ならん。南冠勞楚、奏は、南地即ち楚國のため忠を竭して哀歌を奏し、最後水に没せし屈原。北節倦胡塵、北地に捕虜と爲り、而かも漢節を持って狄地に十九年も勞せし蘇武。學類東方朔、東方朔は漢の厭次人、字は曼倩。武帝の時、金馬門侍中と爲る。時に諷諫を以て、帝の過を救ふ。文辭に長ず。答客難の一篇、後の文豪楊雄、班固以下皆之に倣ふ。年餘朱買臣、朱買臣は漢の會稽吳人、字は翁子。家貧つして讀書を好む、常に薪を賣り自ら給す。且行且讀、妻之を羞、去らん事を求む。買臣曰く我年五十當に貴かるべし、今既に四十九、汝が苦しむ日久し、我が貴きを待て當に汝に報ゆべし。妻聽かず去て農夫に適く、武帝の時、巖助なる者、買臣を薦む、拜して中大夫侍中と爲す。東越數、反するを以て、復出て會稽太守と爲る。樓船戰具を治し、東越を撃て功あり、都尉と爲り。其の後吳に入る。故妻、其の夫と共に道を洒掃す、買臣之を憫み、呼んで後車に載せ舍に歸り、園中に置く。故妻慚忿して自ら經れ死す。要するに學問は東方朔や、朱買臣の如くに力を具すと雖も、武帝の如き明天子に遇はざるが故に、猶貧に苦しむとの意なり。二毛、晉の潘岳「秋興賦」に、余年三十有二。始見二毛。唐の駱賓王の詩、結綬疲三入。承冠泣二毛。二毛は上の二句にて知る、白と黒との髪がある意味。貧とも富とも言ふこと能はず、此の篇の意は、白毛が多く爲つたから、書物も萬卷は讀破したり、而かも舊に仍て依然貧窮なりとなり。

此の篇、前述の如く、徹頭徹尾、自他古今共に不明なり。東方朔も朱買臣も不遇の人にあらず。逸老も伊人も共に不遇の人にあらず。悉く出世して上天したる人なり。其れ等の人人を羅し來て以て、悲不遇の題下に置く。讀む者之を解する者幾人あるや。結末二句に依れば、古人は此の如く始めは苦しみ、後は出世す。然るに我は白髮の年、萬卷の書を讀んでも、いまだ明君に遇はずと解する外なし。正三位式部卿たる人の作が眞とすれば、文字を以て詐偽に類することを言つたに過ぎず。余は此の如くならざるを冀ふ。或は余の洞徹せざる罪ならん。賢者の叱正を乞ふ所以なり。



五言遊吉野川

芝蕙蘭蓀澤  
松柏桂椿岑  
野客初披薛  
朝隱翹投簪  
忘筌陸機海  
飛繳張衡林  
清風入阮嘯  
流水韻嵇琴  
天高槎路遠  
河迴桃源深  
山中明月夜  
自得幽居心

芝と蕙と蘭と蓀、盡く香草。澤は水の常に霑す處。松と柏と桂と椿と盡く貞木。岑は山の高き處。吉野には香草と貞木の多きを曰ふ。野客字の如く、野夫樵客を指す。是の人等が初めて蘿薛の類を披き、朝隱、朝廷の官に隠れる人が、此に來て翹時、寬いで遊ぶ。簪は簪纓。簪紘と成語して、官吏の冠を曰ふ。官吏と曰ふ様な堅苦しい氣持を捨てゝの意を投簪と曰ふ。忘筌は、『莊子』の語。外物篇に、筌者所<sub>レ</sub>以在<sub>ル</sub>魚。得<sub>レ</sub>魚而忘<sub>ル</sub>筌。筌は魚を捕る「ヤナ」なり。陸機海、晉の陸機が、文詞は海の如く深し、而かも善く之を學べば、魚を得れば筌を忘ると同様、陸機に倣つたと云ふ痕跡の無くなるを言ふ。飛繳、繳は矰赤と成語して、絲を付け鳥を射る具。張衡林、漢の張衡が詩賦は林の如く茂し、是も亦善學し、鳥を捕ふれば、繳を忘るゝを要す。而して清風を聞けば、阮步兵が嘯くかと疑ひ、流水を看ては、嵇叔夜が琴を彈ずるかと疑ふ。天は高く見ゆるを以て、槎路の遠きを知

り、河は支廻して桃源の深きを知る。槎路も桃源も超人間でなければ、到る能はざるの處なり。山中、自得、此の如き幽邃の地、明月の夜、特に幽居の心を自得する。自得は自覺と同じ。眞に幽居は此の如き處にあらざれば、嘗て知るを得ざるとなり。此の篇は前詩の如く、難すべき點無し。

五言奉<sup>ル</sup>西海道節度使<sup>ヲ</sup>之作

往歲東山役  
今年西海<sup>ニ</sup>行<sup>ク</sup>  
行人一生<sup>ヲ</sup>裏  
幾度<sup>ヒガ</sup>倦<sup>ム</sup>邊兵<sup>ニ</sup>

奉<sup>ル</sup>の字、爲る意味、節度使は唐に始まる、一地方の軍政、及び行政を總轄する官。去年は東山に在り、今年<sup>ニ</sup>は西海<sup>ニ</sup>に行く。役人の一生、今日の所謂浮草<sup>ウキクサ</sup>。東西南北、定め無し。倦<sup>ム</sup>邊兵<sup>ニ</sup>、帝京近畿を除く外、皆是れ邊土なり。其の邊土の兵を使役することに倦むとなり。此の詩輕輕に敘し去て、却て唐絶の佳と爲る。長きを弄するもの、此の篇の短なるに及ばず。